

根本中堂

不滅の法灯が、何世紀にもわたって、山寺の総本堂である根本中堂の内陣を優しく照らしてきました。総本堂は宝珠山の麓にあり、山寺へ登る際、最初に目にする建物です。山寺は、京都と滋賀にまたがる比叡山の天台宗総本山、延暦寺の分院です。根本中堂には、癒しの仏陀・薬師如来が安置されています。

根本中堂は山寺の中でも最も古い建物の1つで、重要文化財に指定されています。山寺の創建後、慈覚大師円仁（794～864年）により860年に創建されました。本堂は、1356年に、初代山形城・主斯波兼頼（しばかねより）（1329～1379年）により再建されました。そのため、日本最古のブナの建造物といわれています。平屋の本堂の屋根は、大きな入母屋造りでできています。入母屋造りは中国から伝来した様式で、仏教建築によく見られるものです。

根本中堂の内陣は一般に公開されています。木造薬師如来立像が内陣中央の厨子（ずし）に安置されています。円仁自らが彫ったとされるこの薬師如来立像は、50年に1度しか一般公開されません。日光菩薩と月光菩薩が厨子の脇に立ち、その周りを十二神将が囲んで薬師如来を護っています。

厨子の前では不滅の法灯が燃えています。慈覚大師円仁は、この聖なる炎を延暦寺から運び、山寺の創建を記念しました。数世紀にわたり、山寺と延暦寺の炎はそれぞれ異なる時期に燃え尽きているものの、一方の炎が消える度に、もう一方の炎で再び灯が灯されてきました。以来、1,200年以上にわたって、両寺の炎は絶えず燃えています。

内陣の右隅には、知恵の文殊菩薩立像が安置されています。かつては文殊堂という専用の建物がありましたが、火事の後には根本中堂に移設されました。毘沙門天立像は四天王の一尊に数えられる武神で、左隅に立っています。